

歴博をあるく

# 碑から時代を知る

広報部会取材

友の会ニュースでは2008年～2011年にかけて広報部会取材による「歴博再発見」シリーズを掲載しました。第二弾として本号より「歴博をあるく」というコーナーをもうけ、歴博の展示品について写真を交えて紹介します。今回は総合展示の特定の一室に焦点を当てました。今回は切り口を変えて、先ずテーマを決め、複数の展示室をタテに眺めてテーマに共通する展示品を紹介します。写真は、出所を記載したものを除き、広報部会で撮影しました。

第1回目は<sup>いしぶみ</sup>碑です。総合展示室の1～3室には必ず何らかの碑が展示されています。碑は歴史文化の由来碑で、刻まれた文字からその時代の社会や生活の様子を知ることができます。歴博では1997年に企画展「古代の碑 - 石に刻まれたメッセージ -」を開催し、遺存する古代碑15基を一同に集めて展示しました。

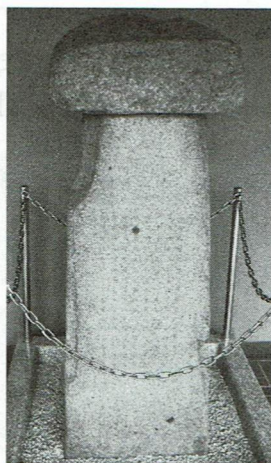
古代の碑については、失われたものも含めて24基が知られており、現存する17基のうち多賀城碑の複製品が第1室に、また中庭周囲の「碑の小径」には10基の複製品が整然と展示され、それぞれの説明版に建立の由来が記されています。

碑は刻まれた銘文自体に目的があり、日本三古碑のうち那須国造碑(国宝)は顕彰碑として、多賀城碑(重要文化財)は多賀城の修築を、多胡碑(特別史跡)は郡の設置を記念して建立されました。

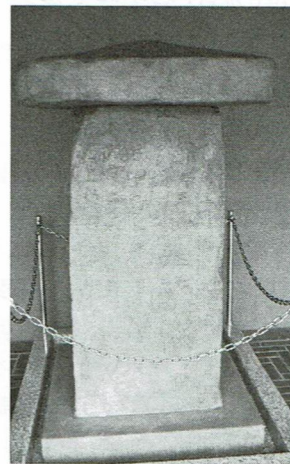
歴史文化の由来や時代を特徴づける事象を刻した多様な記念碑が現代においても日本のみならず世界各地で造られています。



多賀城碑 (第1室)



那須国造碑 (碑の小径)



多胡碑 (碑の小径)



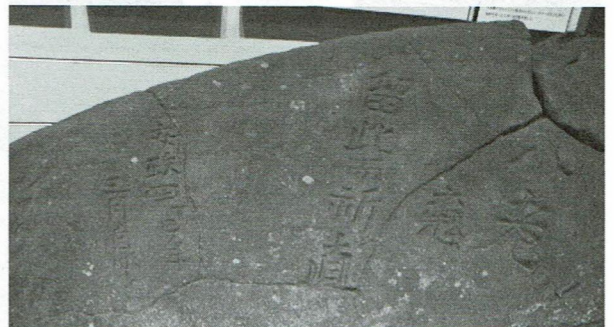
板碑 (第2室)

## 板碑 (第2室)

板状の石に梵字などを刻んだ板碑は、関西地方にはほとんど見られない、東国に顕著な文化遺産である。(説明ボードより)

## 菅野八郎自刻の碑 (第3室)

菅野八郎は、ペリー来航に危機感をもって、海防を論じたため、安政の大獄で八丈島に流刑となる。この碑は、日常道徳に裏づけられた自らの信念が後の世まで残ることを祈念し、「八老魂留此而祈直」という文句を自ら刻んだもの。(説明ボードより)



菅野八郎自刻の碑 (第3室)